

保育士養成課程の「子どもの食と栄養」による食育実践力育成の検討

Study of Dietary Education Practical Skills Development through
“Food and Nutrition for children” in the Nursery Teacher Training Course

鶴 見 裕 子
Hiroko Sumi

(要約)

保育士養成課程の食について学習する「子どもの食と栄養」における実践的食学習による食育実践のための学習成果について質問紙調査を行った。その結果、保育者養成における食の実践的学習により、食育のための知識やスキルの習得、食育実践のための態度、食育意識、自身の食意識は向上した。しかし、日常の食態度の向上には至らなかった。また、学生自身の食生活改善意欲によりその成果、特に食育実践のための態度には差がみられた。

(キーワード)

食育実践力、保育者養成、授業

はじめに

我が国の食生活は社会環境の変化やライフスタイルの多様化に伴い著しく変化している。現在の食生活状況は食に関する情報が氾濫しており、消費や販売形態が多様化し、多種多様な食品・食材が出回り、豊かさを享受できている反面、偏食、欠食、不規則な食事、肥満、痩身、孤食等多くの課題があり、国民の心身の健康や成長に影響を及ぼしている。さらに、家族との共食、家庭内調理の減少等により家庭での食文化の伝承の喪失が懸念されている。そのような背景から平成17年制定された食育基本法により食育の総合的かつ計画的な推進が求められ、平成18年の第1次、平成21年には第2次食育推進基本計画で具体的な施策が示された。

特に、食育基本法では健全な心身の育成のために子どもの「食」の重要性が明示された。平成16年3月には基本法制定に先駆け「楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～」¹によって保育所での食育実践のための指針が明示された。さらに、食育基本法を受け、平成21年度施行の「保育所保育指針」²には、保育内容の改善として「健康及び安全」の中で食育の推進を掲げ、保育所における食育の目標と留意事項が示された。また、同年度施行の「幼稚園教育要領」³においても「健康」領域の中で食育が明示された。このような施策により、保育所、幼稚園で食育を積極的に推進していくことが示され、保育現場では多彩な食育活動が取り組まれている。保育者には食に関する知識や技術、食育実践力が求められおり、保育者養成においても養成課程卒業後、保育現場で食育を担うことができる実践力を育成する教育を構築する必要がある。

一方、保育者をめざす年代の若者は食生活の乱れが憂慮される結果が報告⁴されており、筆者はこれまで食に対する正しい知識や技術を身につけ、食生活に問題意識を持ち、食を自己管理できる学生が多く

くない現状や教育内容の検討を報告⁵⁻⁷した。

前報⁸において保育者をめざす学生の入学時の食育意識や食生活実態の調査より、知識や技術の習得だけでなく、食意識を向上させ、食育実践へ結びつけられる能力育成が必要であり、そのための学習取り組みとして調理実践と食生活改善意欲の向上をあげた。本研究は、保育士養成課程の食学習科目「子どもの食と栄養」における調理実習等の実践的学習による学生の知識やスキルの習得、食育実践のための態度の育成と学生自身の食生活に対する意識や態度を把握するとともに、食生活改善行動との関連を検討することを目的として実施した。

方 法

1. 授業概要

授業の開講時期は「子どもの食と栄養Ⅰ」（必修科目、以下「実践学習前」）は1年生前期に、「子どもの食と栄養Ⅱ」（選択科目、以下「実践学習後」）は1年生後期に、各15回授業で開講している。表1に授業概要を示した。「実践学習前」は理論編で、まず、栄養・食品・調理の基本的な知識の学習とともに自身の食生活の振り返りを行い、その後、各成長期の食と栄養の特徴を学習する。また食育の基本とその内容について実践事例より学習する。一方、「実践学習後」は実践編として、「実践学習前」の学習内容を調理実習や食育の計画・実践のグループ演習などを行い、各成長期における子どもの適正な食事や対応への理解を深め、保育者としてできる食を通じた子育ち・子育て支援を学習する、という授業計画

表1 授業概要

	子どもの食と栄養「Ⅰ」	子どもの食と栄養「Ⅱ」
テー マ	子どもの食生活と栄養、食育について理論を学ぶ。	子どもの食と栄養、食育について実践から学ぶ。
到達 目標	①子どもの健全な心身の発育と適正な食習慣づくりの重要性を理解する。 ②子どもを取り巻く食環境と食生活の課題を把握し、食育の必要性と保育の場でのあり方を理解する。	①子どもの栄養や食生活を理解したうえで、保育者としての食支援の役割や意義を知る。 ②子どもの望ましい食生活やその支援について保育の場で実践する力を高める。
授業内 容	1. 健康と食生活の意義 2. 食生活の現状と課題 3. 食と栄養に関する基本的知識① 4. 食と栄養に関する基本的知識② 5. 食と栄養に関する基本的知識③ 6. 乳児期の食生活 7. 離乳期の食生活 8. 幼児期の食生活 9. 学童期の食生活 10. 生涯発達と食生活 11. 食育の基本と内容① 12. 食育の基本と内容② 13. 児童福祉施設における食事と栄養 14. 特別な配慮を要する子どもへの対応 15. まとめ	1. 食育活動演習①食に親しむ 2. 食育活動演習②食を伝える 3. 献立と調理の基本 4. 基礎調理実習① 5. 基礎調理実習② 6. 食育活動演習③食を味わう 7. 乳児期（調乳、食機能、ベビーフード） 8. 離乳期の食事（離乳食献立実習） 9. 幼児期の食事（幼児食献立実習） 10. 幼児期の間食（間食実習） 11. 食育教材の立案構成 12. 学童期の食事（学童期の給食献立） 13. 特別な配慮を要する子どもの食事 14. 食育教材の発表・展示 15. まとめ

で行った。先行研究^{8・10・11}に示されたように、理論編「実践学習前」においては講義のみでなく、自身の食生活の振り返りと現状を知る課題を導入し、まとめでのグループワークを取り入れた。また、「実践学習後」では各授業項目の調理実習のなかで、調理技術の習得、使用食材の基礎知識、調理操作の科学的根拠等の学習を組み入れた。さらに、実習内容から食育活動を想定した考察につなげる展開へと工夫した。

2. 質問紙調査

1) 対象者と調査方法

本学子ども学科の2012年度入学生の「実践学習前」(開講時期2012年4月～7月)と「実践学習後」(開講時期2012年10月～2013年2月)の受講生を対象とした。調査時期は「実践学習前」および「実践学習後」の授業最終日に同一内容の質問紙調査を行い、実践的学習の前後の学習内容理解、食育意識、食生活実態を検討した。調査は授業内で配布、調査趣旨と倫理的配慮を説明し、記入後回収した。

2) 調査内容および分析方法

調査内容は、食育意識2項目(関心と参画意識)、保育者としての食育支援のための態度4項目、食育実践のための知識・スキルの習得6項目、学生自身の食生活状況8項目(食態度、食意識、食改善行動)について、2～5件法で回答を求めた。集計は、対象者の属性は単純集計し、質問項目は順序尺度の回答肢について項目の望ましい回答から高得点を付し、得点化して項目得点とした。検定は χ^2 検定および対応のあるt検定を用いた。統計分析にはSPSSver21.0を使用し、有意水準は5.0%(両側検定)とした。

3) 倫理的配慮

調査目的および、データ整理のため学籍番号の記載は求めるが調査結果は統計処理を行い、個人を特定するものでないこと、回答内容は成績評価に関連せず、対象者が不利益になることはない等を調査紙面に明記し、さらに調査実施前に口頭にて説明を行い、同意の得られた対象者に対して実施した。なお、本研究は本学研究倫理委員会の承認を得ている。

結 果

1. 基本属性について

アンケート回答者は「実践学習前」155人、「実践学習後」105人であった。「実践学習前」、「実践学習後」とも受講し、回答を得た105人から、記載不備を除いた104人の回答を分析対象とした。

対象の属性は、男子5名(4.8%)、女子99名(95.2%)で、年齢は18.75歳(II調査時)であった。高校の出身学科は普通科56名(53.8%)、商業科23名(22.1%)、総合学科9名(8.7%)、農業・家政学科5名(4.8%)、その他11名(19.3%)であった。居住形態は自宅生が97名(93.3%)、下宿生等が7名(6.7%)とほとんどが自宅通学生であった。居住形態の結果を反映し、日常の主な調理担当者の回答は、本人6名(5.8%)、母親82名(79.6%)、母以外の家族7名(6.8%)、その他8名(7.8%)であった。

表2 実践的学習前後の比較

		実践学習前		実践学習後		
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
	調理頻度*	1.54	0.861	1.46	0.764	0.301
	栄養バランスを考えた食事#	3.26	0.891	3.21	0.962	0.566
	主食主菜副菜の揃った食事をとる*	2.61	0.886	2.59	0.899	0.828
食態度・食意識	副菜を日に2回以上食べる*	2.60	0.819	2.59	0.888	0.916
	食を話題にすることが多い#	2.31	0.813	2.48	0.859	0.063
	食生活に満足している#	2.99	0.757	3.16	0.726	0.014
	楽しく食事をする#	3.51	0.776	3.61	0.582	0.167
知識・スキルの習得	栄養素の概要	2.13	0.496	2.33	0.645	0.004
	食品の安全・安心	2.33	0.548	2.52	0.591	0.002
	日本や地域の食文化	2.15	0.567	2.38	0.612	<0.001
	食物栽培	2.15	0.553	2.36	0.622	0.001
	バランスのとれた食事	2.25	0.587	2.44	0.620	0.002
食育支援のための態度	食育教材つくり	1.97	0.514	2.54	0.590	<0.001
	乳汁栄養	1.97	0.516	2.29	0.537	<0.001
	離乳食	2.13	0.558	2.47	0.574	<0.001
	幼児食	2.19	0.559	2.50	0.540	<0.001
	信頼される保育者になりたい	4.89	0.339	4.93	0.252	0.250
食育意識	親子に食への関心を高めてもらいたい	4.48	0.574	4.63	0.541	0.020
	親子と一緒に食生活の問題を考えたい	4.35	0.606	4.48	0.608	0.085
	親子の食生活改善への助言をしたい	4.42	0.692	4.57	0.604	0.054
食育活動への参画意識	食育への関心	4.27	0.779	4.49	0.574	0.004
	食育の認知	2.15	0.538	2.26	0.464	0.063
	食育活動への参画意識	3.94	0.786	4.28	0.689	<0.001
食生活改善行動	食生活で気をつけていることがあるか	2.33	0.806	2.59	0.796	0.036

項目得点は平均値と標準偏差、対応のあるt検定

調査項目の尺度の得点方法

- ・食態度3項目（*）：「ほぼ毎日」4点、「週に4～5日」3点、「週2～3日」2点、「ほとんどない」1点
- ・食意識4項目（#）：「かなりできる」5点、「少しできる」4点、「どちらでもない」3点、「あまりできない」2点、「全くできない」1点
- ・知識・スキルの習得：「充分ある」4点、「まあまあある」3点、「あまりない」2点、「全くない」1点
- ・食育支援のための態度：「強くそう思う」5点、「少しそう思う」4点、「どちらともいえない」3点、「あまりそう思わない」2点、「全くそう思わない」1点
- ・食育の関心：「関心がある」5点、「どちらかといえば関心がある」4点、「どちらかといえば関心がない」3点、「関心がない」1点、「わからない」0点
- ・食育の認知：「言葉も意味も知っていた」3点、「言葉は知っているが意味は知らない」2点、「言葉も意味も知らなかった」(1点)
- ・食育活動への参画意識：「重要だと思う」3点、「どちらともいえない」2点、「重要だと思わない」1点
- ・食生活改善意識：「気をつけていることがあり、ずっと継続している」4点、「時々気をつけることがあるが、今後それを継続するかはわからない」3点、「気をつけることはないが、今後何か気をつけようと思う」2点、「気をつけることはないが、今後も気をつけるつもりはない」1点

2. 実践的食学習前後の比較

実践的食学習をする前後を比較した結果を表2に示した。食育実践のための態度は、4項目とも平均得点が4点以上（5点満点）と実践学習前後とも高得点であり、「子どもや保護者に食への関心を高めてもらいたい」（ $p < 0.05$ ）が「実践学習後」に有意に向上した。また「子どもや保護者に食生活の改善のための助言をしたい」、「子どもや保護者と一緒に食生活の問題を考えたい」では有意差はないが高まった傾向はあった（ $p < 0.1$ ）。食育実践や乳幼児の食に関する知識・スキルの習得では9項目すべて「実践学習後」に有意に向上した。食育意識では「食育に関心ある」（ $p < 0.01$ ）、「食育活動に参画する」（ $p < 0.001$ ）が高くなった。また、学生自身の食生活状況は「現在の食生活に満足している」（ $p < 0.05$ ）、「食生活で特に何か気をつけてている」（ $p < 0.05$ ）が有意に高くなった。しかし、「調理の頻度」や「主食・主菜・副菜の揃った食事の回数」、「副菜のとり方」など自身の食態度には向上はみられなかった。

3. 実践的食学習と食生活改善への行動との関連

食生活改善行動の設問「食生活で特に何か気をつけていることがあるか」の4段階の回答の「実践学習前」から「実践学習後」での変化から回答が向上した学生44名を向上群、そうでなかった学生60名を非向上群とした。表3に食生活改善行動の変化を示し、

表3 実践学習前後の食生活改善行動変容 (人数)

		実践学習後				
		前熟考期	熟考・準備期	実行期	維持期	計
実践学習前	前熟考期	1	3	6	6	16
	熟考・準備期	1	19	21	3	44
	実行期	4	21	9	4	38
	維持期	0	2	3	1	6
	計	6	45	39	14	104

塗りつぶしが向上群にあたる。また、表4に実践学習前後の行動変容の結果を示した。

1) 向上・非向上群の特徴

性別、出身学科、調理担当者には差がなかったが、居住形態で差がみられ、食を自己管理する下宿生は向上群が多く、自宅生は非向上群が多かった。

実践的食学習前に向上・非向上群間で差がみられた項目は「食生活の満足度」（ $p < 0.05$ ）で向上群が非向上群より低かった。また、「調理の頻度」（ $p < 0.01$ ）、「食生活改善の助言をしたい」（ $p < 0.05$ ）、「食育に関心ある」（ $p < 0.001$ ）の3項目は向上群が高かった。それ以外の項目には差はみられなかった。実践的食学習後の結果からは「調理の頻度」（ $p < 0.05$ ）、「食生活改善の助言をしたい」（ $p < 0.05$ ）、「子どもや保護者と一緒に食生活の問題を考えたい」（ $p < 0.01$ ）、「食育に関心ある」（ $p < 0.05$ ）で向上群が有意に高かった。

食生活改善行動の要因には食学習による知識・スキルの習得よりも、調理実践経験や食育への関心の高さが大きいと考えられる。

2) 向上群と非向上群における実践的食学習の成果

向上・非向上群それぞれの実践的学習前後の比較結果より、食生活改善行動が向上した群は「食事の満足度」（ $p < 0.01$ ）が高くなり、知識・スキルの習得では栄養素、食文化以外の項目は有意に向上した。食育実践のための態度項目の「子どもや保護者と一緒に食生活の問題を考えたい」が有意に高く（ $p < 0.05$ ）、他の3項目も高い傾向（ $p < 0.1$ ）にあり、「食育活動に参画する」（ $p < 0.05$ ）意識も高まった。

一方、非向上群は知識・スキルの習得では食物栽培以外が向上し、「食育に関心ある」(p<0.001)、「食育活動に参画する」(p<0.01)も高かった。しかし、食育実践のための態度は4項目とも前後で差がなく向上していなかった。

表4 食生活改善への行動変容との関連

	向 上 群			非 向 上 群			群間差 p 値	
	実践学習前	実践学習後	前 後 差 p 値	実践学習前	実践学習後	前 復 差 p 値	実践学習前	実践学習後
食態度・食意識	調理頻度	1.79±1.0	1.63±0.95	0.255	1.37±0.69	1.33±0.57	0.749	0.020 0.047
	栄養バランスを考えた食事	3.33±0.90	3.36±0.93	0.864	3.20±0.89	3.10±0.98	0.427	0.407 0.193
	主食主菜副菜の揃った食事をとる	2.56±0.91	2.74±0.93	0.173	2.64±0.88	2.48±0.87	0.159	0.648 0.134
	副菜を日に2回以上食べる	2.65±0.90	2.72±0.93	0.628	2.56±0.76	2.49±0.85	0.583	0.568 0.196
	食を話題にすることが多い	2.37±0.76	2.56±0.83	0.103	2.26±0.85	2.43±0.88	0.235	0.501 0.443
	食生活に満足している	2.81±0.82	3.19±0.76	0.002	3.11±0.69	3.15±0.70	0.687	0.045 0.791
知識・スキルの習得	楽しく食事をする	3.37±0.76	3.56±0.55	0.132	3.61±0.78	3.64±0.61	0.687	0.130 0.486
	栄養素の概要	2.16±0.48	2.30±0.64	0.183	2.10±0.51	2.34±0.66	0.010	0.517 0.746
	食品の安全・安心	2.37±0.54	2.56±0.63	0.073	2.30±0.56	2.49±0.57	0.009	0.483 0.575
	日本や地域の食文化	2.23±0.57	2.40±0.62	0.128	2.08±0.56	2.37±0.61	0.001	0.182 0.816
	食物栽培	2.12±0.45	2.42±0.63	<0.001	2.18±0.62	2.31±0.62	0.146	0.542 0.390
	バランスのとれた食事	2.23±0.61	2.51±0.67	0.009	2.26±0.58	2.39±0.59	0.088	0.801 0.341
食育支援のための態度	食育教材つくり	2.02±0.47	2.55±0.63	<0.001	1.93±0.54	2.54±0.57	<0.001	0.385 0.956
	乳汁栄養	2.00±0.54	2.33±0.61	0.007	1.95±0.50	2.27±0.48	<0.001	0.631 0.557
	離乳食	2.14±0.56	2.51±0.63	0.005	2.13±0.56	2.44±0.53	0.001	0.940 0.548
	幼児食	2.26±0.54	2.53±0.60	0.017	2.15±0.57	2.48±0.50	<0.001	0.333 0.582
	信頼される保育者になりたい	4.91±0.37	4.95±0.21	0.323	4.89±0.32	4.92±0.28	0.484	0.749 0.482
	親子に食への関心を高めてもらいたい	4.58±0.55	4.74±0.49	0.090	4.41±0.59	4.56±0.56	0.107	0.134 0.076
食育意識	親子と一緒に食生活の問題を考えたい	4.43±0.63	4.67±0.48	0.017	4.30±0.59	4.34±0.66	0.635	0.274 0.007
	親子の食生活改善への助言をしたい	4.60±0.58	4.79±0.47	0.088	4.30±0.74	4.41±0.64	0.266	0.024 0.001
	食育への関心	4.56±0.59	4.65±0.53	0.377	4.07±0.83	4.38±0.58	0.004	0.001 0.016
	食育活動への参画意識	4.09±0.72	4.40±0.62	0.011	3.84±0.82	4.20±0.73	0.005	0.101 0.149

項目得点は平均値と標準偏差、対応のあるt検定

調査項目の尺度の得点方法

表2参照

考 察

保育士養成での食学習科目は、平成22年の保育所保育指針の改定を受け、それまでの「小児栄養」が「子どもの食と栄養」に科目名の名称変更がなされた。これについては「保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）」¹²により、「保育現場において、子ども一人ひとりの心身の状態や発達過程をふまえ、子どもの食にかかわる保育実践を行うことや、子ども集団の食事と栄養について理解することが重要であるため」と示された。さらに、「栄養に関する基本的理解に基づく子どもや家庭への栄養指導や食育の重要性を十分踏まえる」ことも記された。これを踏まえ、シラバス内容も改変され、学習内容がより保育実践に近いものが求められた。特に食育の内容が大きく加えられ、それに伴い、栽培活動や保育の場を想定した食育指導の展開を取り入れた食育実践力育成の授業報告^{13・14}がみられる。本報告で

は、「子どもの食と栄養」科目の中での学生の食育実践力育成を検討するため、科目における実践的学習と学生自身の食生活改善行動との関連を検討した。その結果、食学習において理論学習のみでなく、実践的な学習を加えることにより、食の知識やスキルの習得、食育実践のための態度の育成、食育に対する意識や食生活への満足度などの食意識は向上がみられた。しかし、調理の頻度や栄養バランスのとれた食事をとるなど、学生自身の食態度の向上はみられなかった。本田¹⁵は「小児栄養」の授業において自身の食生活に関わる内容が学習に含まれるが、その内容が自分自身の食生活につながるところまで意識が高まらなかったと同様の結果であった。学生の家庭における家事参加・調理機会の少なさ、また、家庭における調理機会そのものの減少傾向からも、学習した調理経験を家庭において反復することが難しいこともその一因と考える。

また、実践学習前後の食生活改善への行動変容が向上した学生（41.3%）と向上しなかった学生の関連をみると、知識・スキルの習得や食育意識には2群ともに成果がみられた。しかし、保育者としての食育実践のための態度の育成では食生活改善行動に向上していない学生のほうが低く育成されていなかった。食活動は食行動変容段階があがるほど関心領域や視野が広がる¹⁶とある。また、学生への調査^{*}報告^{*}では、学生は食に関する経験の不足とともに食育に対する自身の理解に自信がもてない状況がみられたとある。調理に関する知識や技能の習得不足や日常の調理機会の減少状況にある学生は食育指導のために、自らの食の状況を認識・改善するとともに食に関する能力を向上させる姿勢が求められる¹⁰といわれるよう、養成段階の学生自身の食への関心を高め、調理を積極的に行うような取り組みが重要といえる。

なお、本研究の限界は①食という日常的な生活行為であるため、授業以外での日常生活での影響も考えられる。②保育者養成での科目には、「子どもの保健」「保育内容－健康」など「子どもの食と栄養」と関連がある科目もあり、他の科目の学習が食の学習内容を深めている可能性も避けられない。しかし、本研究により実践的食学習による学生の食育意識や食育実践態度への有用性は示されたと考える。

今後は、行動変容の段階別に分析を加え、食育実践力育成や食意識のみならず、自身の食状況が改善に向けられる食学習内容が必要と考える。そのためには、授業内での模擬食育活動、正課外活動での食育活動参画、他科目との連携等を視野に入れ、「子どもの食と栄養」一科目にとどまらず、養成課程全体での取り組みを検討していきたい。

まとめ

保育者養成課程の食学習科目「子どもの食と栄養」における実践的食学習による食育実践のための学習成果について調査をした。その結果、

- ①学生の知識やスキルの習得、食育実践のための態度の育成、食育に対する意識や満足度など食意識は向上した。
- ②調理頻度や栄養バランスのとれた食事など、学生自身の日常での食態度の向上には至らなかった。
- ③学習の前後で食生活改善への行動変容の向上した学生（42.3%）と向上しなかった学生では、知識・スキルの習得や食育意識にはそれぞれ成果がみられたが、保育者としての食育実践のための態度の育

成には差がみられた。

なお、本研究の一部は、全国保育士養成協議会第52回研究大会（高松）において発表した。

謝 辞

本研究を行うにあたり、調査にご協力いただきました皆様に深く感謝申し上げます。

参考文献

- 1 厚生労働省：「楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～」（2004）
- 2 厚生労働省：「保育所保育指針」（2008）
- 3 文部科学省：「幼稚園教育要領」（2008）
- 4 厚生労働省：平成23年国民健康・栄養調査結果の概要（2013）
- 5 鶩見裕子：女子学生の食生活の研究，高田短期大学紀要，27，161-169（2009）
- 6 鶩見裕子：女子学生の汁物調理に関する研究，高田短期大学紀要，28，113-122（2010）
- 7 鶩見裕子：女子学生家庭料理に関する検討，高田短期大学紀要，29，153-163（2011）
- 8 鶩見裕子：保育者養成短大生の食育実践力育成のための基礎的検討－入学時の食育に関する意識と食生活実態の関連－，高田短期大学育児文化研究，7，29-38（2012）
- 9 神山久美：家庭科における消費者教育の指導法に関する検討－「参加型」と「講義型」による授業実践の比較－，日本家庭科教育学会誌，51，302-309（2009）
- 10 村上陽子：教員養成課程の学生における食意識と食行動－食指導能力の育成を目指して－，静岡大教育学部付属教育実践総合センター紀要，22，33-51（2014）
- 11 柳瀬慶子，鶩見裕子：親子を対象とした食育支援活動における保育学生の意識と学びに関する研究，高田短期大学紀要，31，61-72（2012）
- 12 厚生労働省：保育士養成課程検討会「保育士養成課程等の改定について（中間まとめ）」（2010）
- 13 三浦さつき，島村知歩，古海忍，和田公子，新正敏子：栄養士・保育士養成課程の短期大学生による食育実践の検討，奈良佐保短期大学紀要，18，1-18（2010）
- 14 浅野美登里，坂本裕子，中島千恵，落合利佳：保育士・栄養士をめざす学生の食育実践力、連携力を培う試み，京都文化短期大学研究紀要，49，169-175（2010）
- 15 本田真美，高増雅子：保育士養成課程「小児栄養」の授業が食育へのセルフエフィカシー向上に与える影響，6，171-181（2013）
- 16 武藤志真子：食行動変容段階と食生活改善に関する消費者ニーズとの関連のWebアンケートによる検討，栄養学雑誌，61，31-37（2003）
- 17 山崎久子，木村壽子：「小児栄養」における食育－保育士養成課程「小児栄養」科目の変遷と教授内容についての一考察－，足利短期大学研究紀要，33，39-46（2012）